

## その8

### 上皇ご夫妻がお好きな

#### 万葉秀歌



東 野炎 立所見而 反見為者 月西渡

「東(ひむがし)の 野に炎(かぎろひ)の 立つ見えて 反(かへ)り見すれば 月傾(かたぶ)きぬ」

(東の野に 陽炎の立つのが見えて 振り返って見ると 月は西に傾いている) 柿本人麻呂(巻1・48)

「天皇から庶民まで」、という万葉集に倣って、「日めくり万葉集」の選者も、できるだけ幅広い分野の方々にお願しようということで、出演交渉にあたったことは何回か書いた。「天皇から」というキャッチフレーズはともかく、もとより天皇皇后両陛下に選者になっていただくとか考えもしなかったし、お好きな万葉秀歌についてのお話を伺うことができるなどとは思ってもよらなかった。ところが、その思いもよらない出来事が起こったのである。それがなんと、天皇皇后両陛下（現在の皇ご夫妻）の方からお声がかかったのだ。番組ナレーターの女優檀ふみさんと選者のリービ英雄さんのお二人が皇居に招かれ、一夜万葉集や「日めくり万葉集」について親しく語り合われるという予想だにできなかった機会に恵まれたのである。

年間 300 日を超える公務に励まれている両陛下は、健康を維持するために皇居の中の散歩道を、毎朝早朝から散歩をされているという。散歩の後は、両陛下揃って「日めくり万葉集」の放送に間に合うように居間に移動され、テレビの前に腰を落ち着けられて番組を楽しんでおられたと言う。（「日めくり万葉集」のファンであることは、その後報道もされたので記事の切り抜きを末尾に添付する）

そこで、私たちは、檀さんに、滅多にない機会なので、「日めくり万葉集」として、両陛下がお好きな万葉秀歌をお聞きしていただきたいと依頼した。そして、両陛下にお話を伺ったその時の様子を、檀さんは「望外の幸せ」という素敵な随筆にまとめてくれたので、その一部を抜粋して紹介する。

＜「日めくり万葉集」のおかげで、「望外の幸せ」をたくさん味わうことができた。その極め付きともいべき素晴らしい出来事があって、みなさまにお伝えしたくてたまらなかったのだが、番組の宣伝めくのが申し訳なくて、いままでかたく秘していた。

さる夏の夜、なんと、天皇皇后両陛下から、「お茶をご一緒に」と、お招きを受けた。私ごときを、いったいなぜ？一瞬、首を傾げたが、ともに宮中にお招きにあずかったのが、リービ英雄さんと聞いて、「わっ！」と思った。ひょっとして、天皇皇后両陛下は、「日めくり万葉集」をご覧なのではないかしら。リービさんは、選者として何度も番組に登場されている。

あまりの恐れ多さに胸がふるえる。ご造詣の深い両陛下に、あれこれご下問を受けたらどうしよう。だが、謙虚さと厚かましさと、どちらが私のなかで幅をきかせているかといえば、圧倒的に厚かましさの方なのである。ま、万葉集についてのご進講は、リービさんにおまかせして……、私は、全国民を代表して、天皇皇后両陛下のお好きな歌を伺ってこよう。



当日、広く長い廊下を歩いて、通された部屋は、意外と簡素で、飾り気がなかった。しかし、「こちらを、お見せしたかったんですの」と、美智子皇后が柔らかく微笑まれつつ、示された窓の外には、庭園灯に照らされて黄色い花の群れが揺れていた。「陛下がむかし、軽井沢から移植されたユウスゲ。こんなに増えたんですよ。」「さっきまで、月も見えていたけどね」。かたわらで天皇陛下もおっしゃった。いきなり、万葉の世界に迷い込んだような気がして、私は言葉を失った。「あの番組、いつからやっていらっしゃるの？気づいてからは、朝の散歩から走るようにして帰って拝見していますのよ」。ニコニコと陛下も頷かれる。「私は、本日、使命を帯びて参りました」。厚かましい私は、蛮勇をふるって伺った。「両陛下のお好きな歌を、ぜひともお教えてくださいませ！」。美智子さまが陛下のほうをご覧になる。「うーん」と、ほんの少し間を置かれて、陛下が小さく歌うようにに呟かれた。「柿本人麻呂の『東の野にかぎろひの』の歌です」。それが冒頭の歌である。拍手喝采したい思っていた。私も大好きな歌だったからである。「むかしは、野を『ぬ』と言ったけどね」陛下はおっしゃった。

美智子皇后はいくつもお好きな歌があまりのようだったが、ためられつつ、皇后が天皇をお慕いする歌を2つあげられた。そのうちの1つを紹介する。

「たまきはる 宇智の大野に 馬並めて 朝踏ますらむ その草深野」

(宇智の大野に馬を並べて この朝 踏み立てていられるであろう その草深い野よ)

中皇命(巻1・4)

「とてもきれいでしょ。中皇命(なかのすめらみこと)の歌なの。なんだか男の人の名前みたいだけど」。番組では一度も登場していない歌だった。教えていただいたお礼に、「その歌にふさわしいステキな選者を見つけ

て、ぜひ番組でもご紹介させていただきます！」と、お約束してきたのだけれど、それが、その後実現できたのは嬉しい限りだ>

中皇命の「たまきはる」の歌は、その後「日めくり万葉集」で取り上げることになる。奈良万葉文化館には154人の日本画家が万葉集をテーマにして描いた絵が所蔵されている。その中に日本画の巨匠故・高山辰雄画伯がこの歌をテーマに描いた大作があり、この作品をもとに、同館総合プロデューサー大矢鞆音氏に「たまきはる」の歌について語ってもらい好評だった。中皇命が誰なのか定説はないが、孝徳天皇の皇后説が有力だ。この歌は、その前の長歌に続く反歌で、舒明天皇が宇智の野で狩りをした時に奉った歌だが、巻1の3番と4番という万葉集の冒頭部分に位置する重要な歌である。

万葉集には古代の天皇や皇后の秀歌が数多く収められており、皇室と万葉集は切っても切れない関係にある。通常天皇皇后はご自身で書かれたものが残されることは少ない。特に皇后の書きものはほとんど残されていないという。しかし、和歌だけは例外で、万葉集以来天皇皇后の御製歌は数多く残され、皇室の歴史の分析や時の天皇の胸中など推し量ることに役立つと言われている。特に明治天皇は御製の数が多く9万3千余首に及んでいるというから驚きだ。まさに歌人天皇である。

天皇が催される歌会を「歌御会（うたごかい）」という。宮中では年中行事としての歌会などの他に、毎月の「月次歌会（つきなみのうたかい）」（略して、「月次会」という）が催されるようになった。これらの中で天皇が年の始めの歌会として催される歌御会を「歌御会始（うたごかいはじめ）」といい、現在の「歌会始」につながったという。皇室と和歌は切っても切れない関係にあることの証である。

また、檀さんは席上、皇后陛下から万葉集にまつわるお話しをもう1つ聞き出されている。天皇家のご長女清子さまは、結婚されて黒田清子さんになられたが、旧名は紀宮（のりのみや）清子（さやこ）内親王である。このお名前は、万葉集の巻6に収められた、山部赤人が聖武天皇のお供をして紀伊の国に旅をしたときの長歌（巻6・917）から選び取られたものであるという。この「紀伊の国」と「清き渚に」から、「紀宮清子」と命名されたという。「清」を「さやか」とも読むことを、皇后陛下ご自身が確認された上で、「清子」を「さやこ」と読むように決められたとのことでもあった。今の上皇ご夫妻が万葉集を愛され、「日めくり万葉集」を好んで視聴された理由がよく分かるところである。

檀さんが、「全国民の代表」として、両陛下にお尋ねしてくれた「万葉集の中で、好きな歌は何ですか？」という質問は、檀さんのみならず、私たち「日めくり万葉集」の担当者にとっても、「時の天皇から無名の庶民まで」という番組の基本コンセプトを全うした、文字通り「望外の幸せ」だったのである。



# 天皇・皇后 両陛下が 欠かさず観る 「朝の番組」の名前

早朝の  
散歩のあと、  
楽しみに  
されて

11月10日、スペインのフアン・カルロス一世国王夫妻が来日すると、昼は歓迎行事に、夜は宮中晩餐会に相次いで出席した天皇・皇后両陛下。高齢にもかかわらず多忙な日々を過ごされていることに、心配の声は尽きない。だが、宮内庁関係者によると、そんな両陛下には、毎朝迎える、安らぎのひとつがあるという。それはある5分間のテレビ番組だった――。

年間300日を超える公

務に励まれている両陛下。健康を維持するために、早朝から散歩をされているという。  
「両陛下は、皇居にいらつしやることで天候の良い日には、一般には公開されていない皇居の中の散歩道を、30分ほどかけて歩かれています。皇居は自然の宝庫といわれ、カシの大木やヤマユリなどの花々、タヌキやハクセキレイといった動物や野鳥の姿も観られる。昭和天皇もお好きだった皇居の散歩を、両陛下も

楽しんでいらつしやるよう  
です」(宮内庁関係者)

散歩で清々しい汗を流されたあとは、両陛下揃って居間に移動し、テレビの前に腰を落ち着ける。

「散歩が終わってから、NHKデジタル衛星ハイビジョンで放送されている『日めくり万葉集』という番組を観るのを、両陛下は毎日とても楽しみにされております」(前出・宮内庁関係者)

両陛下が習慣的に視聴されているという『日めくり万葉集』は、今年1月から放送が始まった、平日の毎朝6時55分から始まる、5分間のミニ番組。

雅楽師の東儀秀樹氏(49歳)や書家の武田双雲氏(33歳)、作家の浅田次郎氏(56歳)など、各界の著名人が出演、毎回一人が一首ずつ万葉集のなかから歌を選定し、歌の内容に沿った自身のエピソードを語る。歌を解説するのは、女優の檀ふみ氏(54歳)だ。

「万葉集をご存じない方もご興味を持っていただけられるような番組作りを目指

し、いまでは、男女問わず、ご年配の方を中心に好評をいただいております。檀ふみさんの、温かく心に染み渡る語りも人気です。

番組は1年間(全240回)で終了しますが、元旦には、『万葉集への招待』という番組名で特番が放送される予定、来年1月5日からは、教育テレビで再放送が決定しております」(NHK広報局)

視聴者のなかに両陛下が含まれていることは、檀氏にとっても励みとなつていくようだ。

「陛下をご覧になつていらつしやることは、存じておりました。これからも、より一層、みんなで良い番組を作るべく頑張らせていただきます」



仲睦まじい様子の両陛下(上)。「日めくり万葉集」のワンシーン(下)。バラエティ豊かなゲストが魅力だ



万葉集は、7世紀後半から8世紀後半に編まれた、現存する最古の和歌を集めた歌集。番組もさることながら、万葉集と天皇家は、歴史的にも繋がりが深いと話すのは、皇室ジャーナリストの松崎敏弥氏だ。

「万葉集には歴代天皇が詠まれた和歌がたくさん入っているし、日ごろから勉強をされるためにも番組をご覧になつているのかもしれないね。もともと両陛下は和歌に対してご熱心で、年始に行われる宮中行事の歌会始(共通のお題で歌を詠み、披露する会)では、両陛下ともご自身で作られた歌を詠まれています。

また、東京都庁職員の前田慶樹さんとご結婚された黒田清子さんの旧名である、

「紀宮清子」というお名前は、万葉集の第6巻に収められた、山部赤人が聖武天皇のお供をして紀伊の国に旅をしたときの長歌から選り取られたものです」  
来年は即位20周年、ご成婚50年など、今年以上の激務が予想される。そうした状況を踏まえ、年明けの歌会始で、来年のお題である「生」という文字を用いて、両陛下はどのような歌を詠まれるのだろうか。